# 韓国のハングル古典教育

南　潤珍

## 一　はじめに

韓国の古典文献（1）は表記手段によって漢字で書かれたものとハングルで書かれたものに分けられる。本稿はハングルで書かれた文献に焦点を当て、韓国の中等教育、主に高等学校における古典教育の現状と方向性の概観を目的とする（2）。高校教育の枠組みの中で、ハングルで書かれた古典の学習は国語科で行われることになっており、本稿では国語科教育について以下の内容を取り上げる。

- 韓国の高校教育システムの中での古典教育の位置づけ
- ハングル古典文献の種類と古典教育の領域
- 古典教育の内容と方法

## 二　韓国の高校教育システムの中での古典教育の位置づけ

### 1　教育課程における古典教育

韓国の学校教育は教育目標、内容、方法、評価を定めた「教育課程」に沿って行われる。教育課程は一九五四年に初めて公布され、その後改定を重ね現在は第七次教育課程に基づいた学校教育が実施されている。この中で古典教育は主に国語科教育課程の枠組みの中で行われてきた。したがってここでは六回にわたる国語科教育課程改編の中で高校の古典教育がどのように変化してきたかを見ることにする。

高校の国語科教育は第二次教育課程から共通必須科目の「国語1（あるいは国語）」と深化科目の二元体制として構成されてきた。深化科目はいくつかの科目に分けられておりその分け方はそれぞれの時期によって異なる。その内訳を表で示すと以下のとおりである。

チョ・ヒジョン（二〇〇五）では共通必須科目である国語（1）または国語の教科書で古典文献を取り上げている単元の数を調査したが、その内訳は以下のとおりである。

国語教科書の小単元の中で古典が占める比率は五分の一から三分の一まで様々ではあるが、必須共通科目の国語科目の一部分として安定的な地位を持っていることが確認できる。

一方、共通必須科目と深化科目が分離できた二次教育課程からは古典が深化科目として拡大していく。深化科目として

| 教課仮定 | 1次 1954-1962 | 2次 1963-1975 | 3次 1976-1983 | 4次 1984-1989 | 5次 1990-1995 | 6次 1996-2003 | 7次 2004- |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 共通必修科目 | 国語(一) | 国語Ⅰ | 国語Ⅰ | 国語Ⅰ | 国語 | 国語 | 国語 |
| 深化科目 | なし | 国語Ⅱ(古典、漢文) | 国語Ⅱ(古典、作文) | 国語Ⅱ(現代文学作文古典文学文法) | 系列別選択科目(文学、作文、文法) | 課程別必須または課程別選択(話法と作文、読書と文法、文学) | 一般選択科目(国語生活)深化選択科目(話法と作文、読書と文法、文学、(古典)) |

| 教育課程 | 教科書名 | 古典題材を取り上げた小単元の数／全体小単元の数 |
|---|---|---|
| 1次 | 高等国語(1-3) | 22／81 |
| 2次 | 人文系高等学校国語(Ⅰ-Ⅲ) | 21／103 |
| 3次 | 人文系高等学校国語(1-3) | 21／111 |
| 4次 | 高等学校国語(1-3) | 22／93 |
| 5次 | 高等学校国語(上下) | 12／57 |
| 6次 | 高等学校国語(上下) | 18／58 |
| 7次 | 高等学校国語(上下) | 13／35 |

古典を分離するに当たっては、文字から文の構造やテクストの構成、世界観にいたるまで現代のそれと異なる古典を学習する意義を定めるため「民族文化発展の土台としての古典教育」と位置づけている。このような考え方は七次教育課程にまで維持されてきた。第四次教育課程からは深化科目の構成が「古典」から「古典文学」に変更され、国語史や古語文法など言語関連の内容と古典文学関連の内容が分離され、古典文学に焦点が当てられるようになった。さらに第五次教育課程からは「古典文学」が「文学」に編入され、現代文学と古典文学が統合され、文学一般論の延長線上で古典文学の特性が求められるようになった。こうした流れは第七次教育課程にまで維持されている。

現行の第七次教育課程では高校一年の時に「国語」を必須科目として二、三年の時には六つの選択科目から二つの科目を選択して履修することになっている。六つの選択科目の中には「文学」があり、古典教育は主に「国語」と「文学」の二つの科目によって行われる。したがって「文学」を選択しない学生は古典教育を受ける時間が大幅に減少してしまうことを意味する。ところが選択科目の実際の運営を見てみると、学生が六つの科目の中から自由に選択するのではなく、まず学校側が二〜三の科目を選定し、その中から学生に選ばせるのが現実である。実際どれくらいの高校生が「文学」を選択しているかは各高校において選択科目の開設状況を調査した二〇一一年度の統計結果から見ることができる(3)。それによると延べ四、六八一校(四〇、四四八クラス)のうち

選択科目として「文学」を開設している学校の数が一、二八五校（一二、四九〇クラス）であり、六つの選択科目の中でもっとも多い割合を示している。

第七次教育課程で最近注目されるのが「古典」科目の新設である。第七次教育課程は数回の改定を経てきたのであるが、最近の改定で二〇一四年度から選択科目として「古典」が新たに加えられることとなったのである。教科書がまだ出ていないので細部事項は確認できないが、二〇一四年度から施行される改定第七次教育課程の「古典」科目は次のように位置づけられる。

「古典」はわが国と世界の古典を題材とした総合的な国語活動を通じて教養人の備えるべき水準の高い国語能力を深める科目である。この科目は「国語」科目を深化・発展させた科目であり、ほかの選択科目の統合科目として位置づけられる。（「国語科教育課程」、教育科学技術部告示第二〇一一―三六一号別冊五、一五三頁）

「文学」とは別途に多様な種類の古典文献を取り上げ、韓国の古典だけでなく世界の古典を題材として取り入れていることで古典についての知識にとどまらず国語能力を深めることを目標とするのである。

## 2　大学受験における古典教育

周知のように、韓国は学歴重視社会であり、毎年の大学受験の結果や傾向には受験生とその関係者だけでなく、社会全体からの関心が集まっている。それだけに大学受験が高校教育に及ぼす影響力も大きい。大学受験には大きく分けて二つの試験がある。そのひとつは全国共通の試験である大学修学能力試験、いわゆる「修能試験」である。日本のセンター試験に似たようなものといえよう。もうひとつは大学別に実施する論述試験である。

修能試験の試験科目のうち古典教育と関連するものとしては「言語領域」がある。この「言語領域」の試験は大学で効率よく円満な学習をするために必要な言語能力を測定することを目的とし、凡教科的な素材で構成された言語資料を用いて聞く、書く、読む能力などを測定するものである。ここでいう言語資料には人文・社会、科学・技術、文学・芸術、生活・言語など様々な分野の教育的価値の高い文章が選ばれ、それを基にして総合的思考能力、語彙および語法、文学史への理解、古典文学と現代文学を関連させた鑑賞能力などを問う問題が出題される。二〇一一年度の試験から見ると、言語領域五〇問項一〇〇点のうち、古典文学作品を題材にした問題は九問、一七点が配点されている。全体の約二〇％を占めている。

一方、大学別の論述試験では韓国や外国の古典から選ばれたテクストを資料とし、様々な分野の問題への答えが求められている。古典テクストを理解できる読む力と、異なる背景や文脈の事柄を関連付ける思考力、そして問題解決力が問われるのである。このような試験への対策として注目されるの

が資料として出題される可能性が高い古典文献である。古典が注目される背景には試験に古典テクストがよく出題されたこと、そして二〇〇〇年代初め頃からソウル大学の人文学研究所、基礎教養教育院などから発表されてきた「ソウル大学生に薦める古典二〇〇選（4）」などの古典文献リストの存在がある。

このような大学入学試験の傾向は第七次教育課程とともに実現してきたことであり、二〇一四年からの改定教育課程で新設される「古典」科目とその趣旨や構成が合致している。

こうした入試傾向が高等学校教育、特に古典教育に及ぼす影響に対する評価はこれからの課題であるが、個別知識を問うことにとどまる断片的な問題が主流だった以前の入試とは異なる方向へ移っていくように思われる。

## 三　ハングル古典の種類と古典教育の領域

古典教育で取り扱うテクストを定めることは古典教育の領域設定と結びつく。ここでは古典教育で取り上げてきたテクストの特性を把握することで古典教育の領域設定がどのようにされてきたかを概観する。

### 1　表記手段による古典文献の分類と古典教育

古典文献は表記手段によって漢字で書かれたものとハングルで書かれたものに分けられると述べたが、文字運用の事情やテクストの形成過程、テクストジャンルなどを参考にすると以下のように細分される。

漢字で書かれた文献は（一）漢文の文法に従って作られた文を漢字で綴った漢文テクスト、（二）表記は漢字であるがその言葉は韓国語である、即ち漢字を借りて韓国語を表記する「借字表記」によるテクストがある。「借字表記」における文字の運用方法はテクストのジャンルと密接に絡み合うため、「借字表記」によるテクストは、（一）郷札で表記された韻文作品（郷歌）、（二）吏読で書かれた公文書や法律の条文（三）漢文に韓国語の文法要素である吐（口訣）が付けられた経典などに分類される。

一方、ハングルで書かれたテクストには（一）漢文の翻訳テクスト、（二）もともと韓国語で作られたテクストがある。ハングルが作られて間もない時期の文献は儒教経典・仏経などの漢文や漢詩からの翻訳テクストが主流となっていた。さまざまな種類のオリジナルのハングルテクストがたくさん出るようになったのはハングルが作られ、ある程度の時間が経ってからのことである。またオリジナルのハングルテクストは、始めから文字で書かれた創作テクストと民謡や説話などの伝承を文字で書いた伝承テクストに分けることができる。

高校の教育課程には漢文が国語と別途の教科として設けられているため、国語科の古典教育で取り扱うテクストは原則的にハングルで書かれたものに限られる。しかし漢文テクストであっても朝鮮半島の人によって作られ、韓国文化史で重要な意義を持つテクストの場合にはその翻訳を取り上げることで古典教育の領域に入る。そして漢字で書かれてはいるが

言葉は韓国語を反映している借字表記テクストも現代語の解釈がついた形で国語教科書に載っている。翻訳テクストの場合、小説などの散文は翻訳文だけが提示され、韻文は漢字で書かれた原文とその翻訳が一緒に提示されるのが一般的である(5)。

## 2　テクスト種別による古典テクストの分類と古典教育の領域

韓国の古典文献には漢文、借字表記、ハングル表記の形で儒教や仏教関係の経典、文学作品、実用書や教化書など多様な種類のテクストがある。表記文字による分類のほかにテクストの性格によって古典文献を分類し、それぞれの種類のテクストが古典教育で占める割合を検討することで古典教育の領域をより明らかにすることができると思われる。

ここでは必須共通科目の国語教科でどのような古典文献が取り上げてきたかを散文韻文に分けて見ることにする。古典散文の中で第一次教育課程から第七次教育課程まで続けて国語教科書に載せられてきたものは「訓民正音」、「春香歌」、「沈清伝」である。「訓民正音」が言語史的に重要な位置を占めるテクストであるすれば「春香歌」、「沈清伝」はその定本テクストの確定や叙事構造などを巡って数多くの研究結果が蓄積された上、大衆的人気を集めている文学史的に重要な作品である。この二つの作品は韓国の伝統音楽劇である「パンソリ」の演目が小説として定着したテクストである点でも共通している。古典詩歌は様々なジャンルの作品が網羅されており、漢字で表記された古詩歌や借字表記の郷歌、ハングル表記の詩調や歌辞、そして民謡までが掲載されている。

韻文と散文の区別以外に韓国語のオリジナルテクストと漢文の翻訳テクスト（諺解）の分け方がある。前述したようにハングルが作られて間もない時期には韓国語のオリジナルテクストより多い数の諺解文献が作られ、この諺解の伝統は長く続けられてきた。国語教科書には『小学諺解』や『論語』などの散文だけでなく『杜氏諺解』のような漢詩の諺解テクストが載せられている。

現在の第七次教育課程の国語教科書や文学教科書で注目されるのが説話や民謡など伝承文学のテクストを積極的に取り入れていることである。これは読み物としての古典にとどまらず、古典の現代的受容と古典文学作品の創作までを強調している第七次教育課程での試みを反映したものと思われる。一方第七次教育課程の「文学」教科書で注目されるのが韓国の文学だけではなく外国文学をも提示している点である。古典文学作品を文学史の時期区分に合わせて解説・提示した後、同じ時期に外国ではどのような動きがあったのかを作品の翻訳とともに提示しているのである。これは過去の「古典」では全くなかったことであり、古典文学ひいては古典に対する認識の変化を示すものと解釈しうる。

## 四　古典教育の内容

本章では古典教育の内容について三つに分けて検討する。内容の具体的な考察の前に教科書における古典テクストの

提示の仕方について検討する。そして文献を読み、内容を理解するために必要となる言語史の知識の提示および文献をめぐる文学史の知識について検討する。最後に古典文献が置かれた歴史的・文化的文脈の中でその意味を理解し価値を認識するなど古典教育の目標と関連した古典受容と活用の側面について検討する。

## 1　古典テクストの提示の仕方――表記方式を中心に――

前述のとおり、古典テクストはその表記によって漢文、借字表記、ハングル表記のものがあるが、国語科の教科書はハングル表記のテクストを載せるのが基本であるため、漢文や借字表記のテクストは韓国語訳やハングル解読の形で掲載されている。ところが、ハングル表記のテクストといっても現代語とは異なる語彙、文法、表記を含むテクストが殆どであるため、学習者の水準と学習目標に合わせてテクストの提示方法が工夫されなければならない。

高校の国語教科書に掲載されている古典テクストの提示方式をテクスト種別、原文表記、提示方式とそれぞれの小単元の目標領域別にまとめると以下のとおりである。

下の表から、現代語に変換して提示するか古語の形で提示するかを分ける一次的基準は目標領域が言語知識であるか、否（文学あるいは話す・聞く）かにあることが分かる。そして文学領域のテクストであっても韻律や言語形式が文学的理解に重要な役割を果たしている韻文テクストの場合には古語の形で提示されることが一般的であると言える。テクストの

| 資料名 | テクスト種別 | | 原文表記 | 提示方式 | 領域 |
|---|---|---|---|---|---|
| 薯童謡 | 韻文 | 郷歌 | 借字表記 | 借字表記原文と古語ハングル表記 | 言語知識 |
| 老乞大諺解 | 散文 | 外国語学習書 | 漢文＋古語ハングル | 古語ハングル表記 | 言語知識 |
| 小学諺解 | 散文 | 儒教書 | 漢文＋古語ハングル | 古語ハングル表記 | 言語知識 |
| 訓民正音諺解 | 散文 | 説明書 | 漢文＋古語ハングル | 古語ハングル表記 | 言語知識 |
| 東溟日記 | 散文 | 国文随筆 | 古語ハングル | 古語ハングル表記 | 言語知識 |
| 東国三綱行実図 | 散文 | 教化書 | 漢文＋古語ハングル | 古語ハングル表記と現代語訳 | 言語知識 |
| 九雲夢 | 散文 | 漢文小説 | 漢文 | 現代語訳 | 文学 |
| 春香伝 | 散文 | 国文小説 | 古語ハングル | 現代語訳 | 文学 |
| 弔針文 | 散文 | 国文随筆 | 古語ハングル | 現代語訳 | 文学 |
| 送人 | 韻文 | 漢詩 | 漢文 | 漢文原文と現代語訳 | 文学 |
| 青山別曲 | 韻文 | 高麗歌謡 | 古語ハングル | 古語ハングル表記 | 文学 |
| 漁父四時詞 | 韻文 | 時調 | 古語ハングル | 古語ハングル表記 | 文学 |
| 関東別曲 | 韻文 | 歌辞 | 古語ハングル | 古語ハングル表記 | 文学 |
| アリアン | 韻文 | 民謡 | 伝承 | 現代語伝写 | 文学 |
| 鳳山仮面舞 | 散文 | 台本 | 伝承 | 現代語伝写 | 話す・聞く |
| 竜沼と嫁岩 | 散文 | 伝説 | 伝承 | 現代語伝写 | 話す |

性格や目標領域によってテクストの表記の仕方を異にして提示するという方針があることが確認できた。

## 2　言語史および文学史の知識の習得

古典テクストに対する言語学的知識は課題として出されたテクストを読むために求められるものであるが、ツールとしての価値に加えその知識の習得過程そのものが論理的思考や分析力の伸長に非常に役に立つ。そして借字表記法やハングルの創制原理に対する知識は文化史的教養としても重要なものである。こうした点を考慮し、言語史の知識や古語の表現などに関する内容は必修科目である「国語」で教えることになっている。これは今の第七次教育課程だけでなく、昔からの伝統として引き継がれてきた。「国語」教科書には古典題材の提示の前に言語史についての説明文が例題となる古典文献と一緒に提示され、古典文献の解読に必要な知識の習得ができるように構成されている。

一方、第七次教育課程では韓国文学史を記述した説明文が深化科目の「文学」に提示されており、必修科目の「国語」の中で言語史と文学史を同等に取り上げていた過去の教育課程と比べ文学史知識の重要度が落ちているようにみえる。ところが文学史の知識が「文学」で取り上げられるようになったことによって韓国文学史に対するより深層的かつ巨視的接近ができるようになったとも言える。第七次教育課程の「文学」教科書には韓国文学史に併せて同じ時期の世界文学の流れが提示されており、韓国文学を世界文学の流れの中で位置づけようとする試みと解釈できる。

## 3　テクストの意味の理解および受容――古典リテラシーの観点から――

古典テクストを解読することができるようになった段階で、そのテクストが持つ文化・社会的意味を解釈する能力を備えていく必要がある。そのためには文学史や文化史の知識をベースにそれぞれのテクストが置かれていたコンテクストを考える必要がある。第七次教育課程の教科書には多様な補助教材が備えられている。一例として国文小説は「パンソリ」という音楽劇にその起源を置くのだが、文学テクストとしての側面だけが強調されてきた以前の教科課程とは違って、第七次教育課程では練習問題や課題活動を通じて「パンソリ系小説」が持つ音楽的性格を体験できるようになっている。また朝鮮時代の代表的な定型詩ジャンルである「時調」を提示するとき、時調を詠むときに用いられた韓国伝統音楽の楽譜が一緒に提示されており、ある作品が享受されていた文化的背景や創作の場面などを様々な補助教材を利用して理解できるように教育内容が構成されている(6)。

そして古典テクストについて読解の対象としての側面だけを強調していた以前の教育課程に比べて、第七次教育課程では古典テクストを「書く力」の習得のための題材として積極的に取り入れている。たとえば「時調」を提示している小単元の学習活動のコーナーには時調の現代的様式の作品を紹介したあと、それに倣って時調を作って皆の前で発表し、お互

いの作品に対する感想を話し合う活動が課題として出されている。古典テクストは読んで、理解し、鑑賞する対象から書き、発表し、話し合うための題材と位置づけが変わったのである。

こうした変化の背景には、古典文学と現代文学の連続性という問題意識に基づき、古典テクストのパロディーあるいは再創作という現象を古典リテラシーの観点から探ってきた古典文学研究の流れがある。ここでいう古典リテラシーとは、文学という枠組みに縛られず、古典テクストが形成され、運用され、享受されていたコンテクストを理解し、今現在の自分が置かれたコンテクストについて古典テクストはどのような問いを投げかけるかに注意を傾けることである。古典教育に古典リテラシーという概念を取り入れるようになったことから民謡や伝説の古典への受容、世界文学や現代文学と古典文学の接点の模索、文学を超えた世界の古典への古典科目の拡大という試みが実現できたといえるだろう。

## 五　おわりに

これまでの話を以下のようにまとめることができる。

(一) 教育課程の中で古典は共通必須科目である「国語」と選択科目の「文学」で取り上げられている。しかし二〇一四年からは韓国だけでなく海外の古典をも包括する「古典」科目が選択科目として開設される予定である。

(二) 韓国の高校教育に多大な影響を及ぼしている大学入試において、古典は思考力を測定するための素材として注目されてきた。そうした中、韓国の古典文献だけでなく海外の古典文献をも含む「古典」、文学だけでなく様々なテクストジャンルの文献をも対象とする「古典」という考え方が具体化し、教育課程での流れと結びついていく。

(三) 韓国の古典文献は表記によって漢字で表記されたものとハングルで書かれたものに分けられる。漢字で表記されたものには漢文や漢詩と借字表記の文献があり、ハングルで書かれたものには漢文を翻訳したものとオリジナルの韓国語のものがある。国語科目としての古典教育では原則的にハングルで書かれたものを対象にしている。そして漢文や借字表記のテクストについては、その翻訳テクストを取り上げることにしている。こうすることによって古典教育の領域は漢文や漢詩の翻訳から借字表記の解読テクスト、そしてオリジナルの韓国語テクストにまで広がる。

(四) 古典文献はテクストジャンルから見たとき、文学、儒教経典、仏経、論説など多様であるが、長い間、古典教育の主な対象は文学作品であった。

(五) 古典テクストを現代語に変換して提示するか古語の形で提示するかについて古典教育論で活発な議論が行われてきたが、テクストの性格や目標領域によってテクストの提示の仕方を異にするという傾向がみえる。

(六) テクストを読んで理解するために要求される知識のう

ち言語史の知識は必須共通科目の「国語」で、文学史の知識は深化科目の「文学」で取り上げられている。文学史を深化科目で扱うことで世界文学の流れの中で韓国文学を考える広い視野を提供することができる。古典テクストを固定された昔の読みものとしてだけでなく、古典の世界に今の自分の観点から問いかけ、再創作の題材として取り上げることで古典教育の領域が広大している。

(七)

このようにまとめてみると韓国の古典教育は非常に望ましい方向へ進んでいるように見える。しかしそれは教育課程や教科書のようなインフラだけを見たときの話であって、教育現場の事情に焦点を当てるとかなり違う面が見えてくると思う。まず指摘できるのが教育を担当する人的資源の問題である。古典教育を古典文学だけでなく、様々な分野の古典へ広げていくためにはその内容を完全に理解し再組織できる有能な教師と有用なシラバスが必要である。

次に浮かび上がる問題点は、結果重視の受験体制が主導する教育現場で古典文献を読んで吟味する時間的、精神的余裕が確保できるかということである。実際に数多くの進学塾で行われている論述試験対策を見ると、その殆どが古典のダイジェストをもとに答案作成のコツを伝授することに重点が置いてあることが分かる。

## 参考文献

〈論文〉

金容載（二〇〇七）「동아시아 古典教育과文化콘텐츠“Culture-Content”개발」『漢文教育研究』二八、서울：한국한문교육학회、八一―一一四頁（キム・ヨンジェ「東アジアの古典教育と文化コンテンツ“Culture-Content”の開発」『漢文教育研究』二八、ソウル・韓国漢文教育学会）

金亨奎（一九六五）「古典教育의 問題点」『새국어교육』서울：한국국어교육학회、一―三頁（キム・ヒョンギュ「古典教育の問題点」『新国語教育』ソウル・韓国国語教育学会）

박형우（二〇〇五）「교과서의 고전 자료와 그 표기 방식」『청람어문교육』三二、서울：청람어문교육학회、四五―七二頁（パク・ヒョンウ「教科書における古典資料とその表記方式」『青藍語文教育』三二、ソウル・青藍語文教育学会）

배수찬（二〇〇四）「고전문학교육 연구의 방향 설정을 위한 試論」『선청어문』三二、서울：서울대학교 국어교육학과、二五五―二七六頁（ペ・スチャン「古典文学教育研究の方向設定のための試論」『先清語文』三二、ソウル・ソウル大学校国語教育科）

장윤희（二〇〇一）「국어사 지식과 고전문학 교육의 상관성」『한국어교육학회학술발표논문집』서울：한국어교육학회、七一―八一頁（チャン・ユニ「国語史の知

識と古典文学教育の相関性」『韓国語教育学会学術発表論文集』ソウル・韓国語教育学会)
조희정 (二〇〇四) 「고전 리터러시 (Literacy) 교육을 위한 새로운 구도」『국어교육학연구』二一、ソウル:국어교육학회、一二二—一五五頁 (チョ・ヒジョン「古典リテラシー教育のための新しい構図」『国語教育学研究』二一、ソウル・国語教育学会)
조희정 (二〇〇五) 「교과서 수록 고전 재재 변천 연구」『문학교육학』一七、서울:한국문학교육학회、二七七—三二五頁 (チョ・ヒジョン「教科書収録の古典題材の変遷研究」『文学教育学』一七、ソウル・韓国文学教育学会)
조희정 (二〇〇六) 「심화 과목으로서의 고전 교육과정 개정 방향」『문학교육학』二〇、서울:한국문학교육학회、一三三—一六五頁 (チョ・ヒジョン「深化科目としての古典教育課程改定の方向性」『文学教育学』二〇、ソウル・韓国文学教育学会)

〈資料〉

박영민 외 (二〇一二) 고등학교 문학 I、II、서울:비상교육 (パク・ヨンミン他 高等学校文学I、II、ソウル・ビサン教育)
윤여탁 외 (二〇一一) 고등학교 국어 (상) (하)、서울:㈜미리엔 (ユン・ヨタク他 高等学校国語 (上) (下)、ソウル㈱ミリエン)
『教育統計年報二〇一一年—一般高等学校現況』韓国教育開発院
教育科学技術部 (二〇一一) 『高等学校教育課程』教育科学技術部告示二〇一一—三六一

注

(1) 古典文献の定義についてここでは暫定的に「開化期以前から存在してきたテクスト」とする。

(2) 発表者は古典教育を専門とする立場ではないため、ここで報告する内容が決して網羅的で体系的とは言いがたいものであることを断っておきたい。ただ学校教育の全課程を韓国で受けたものとしての実経験に基づいた報告を通して韓国古典教育の流れの一端を示すことができれば幸いである。

(3) 『教育統計年報二〇一一年—一般高等学校現況』韓国教育開発院。

(4) 崔致遠の『桂苑筆耕』、許筠の『洪吉童傳』、金素月全集など韓国の文学作品、『陶淵明詩選』、Sophocles の *Oedipus Tyrannus* などの外国文学作品、知訥の『圓頓成佛論』、李瀷の『星湖僿說』などの韓国の思想書、四書三経や Plato の *Politeia*、Aristoteles の *Politica* など外国の思想書がリストされている。

(5) 翻訳文の提示の仕方は現在の教科書と過去の教科書において異なる。たとえば一九七〇年代後半の教科書には翻訳テクストの訳者への言及がないケースが多

かった。そのため、当該テクストが漢文からの翻訳テクストである事実が看過され、オリジナルの韓国語テクストと誤解される可能性も高かった。このような問題点は現行の「第七次教育課程」の教科書では大部解消され、原作者の名前と並んで訳者の名前も一緒に提示することが多い。こうすることで当該テクストが漢文を底本とする翻訳文であることがすぐ分かるようになっているといえる。

(6)　筆者は時調が持つ音楽としての側面について高校まで認識していなかった。大学に入って初めて「時調」と音楽との関連性についての講義を受けたことで「時調」について改めて考えるようになったことを覚えている。